

◇ 深 澤 均 君

○議長（澁谷俊二君） 次に、14番、深澤 均君の一般質問を許可いたします。深澤 均君、登壇願います。

（14番 深澤 均君 登壇）

○14番（深澤 均君） おはようございます。通告に従って一般質問を行いますので、よろしくお願いをいたします。

第1点目は、少子化の現状と対策についてであります。

厚生労働省が公表した人口動態2017年推計によると、日本の出生数は前年より3万6,000人少ない94万1,000人と、2年続けて100万人を割り込んでいて、少子化がさらに加速し一層顕著になったとしています。

その要因として、主な出産世代である25歳から39歳の女性の人口減であると分析し、政府が掲げる2025年度末までに合計特殊出生率1.8の目標実現は極めて難しい情勢で、実効性のある子育て支援策とともに、少子化を前提とした政策の具体的な検討も求められるとしているところであります。

美郷町においても、2025年度までの人口の推移と推計をもとに、第2次美郷町総合計画「行動計画（後期）」（案）を示し、町民の意見を求めているところであります。

そこで、町の少子化の現状について、①として、町の出生数の推移、未就学児までと、今後の推計を伺うところであります。

そして、後期行動計画の中で、改善に向けた課題として「子育て世代が安心して子供を産み育てられる環境が必要です」とあるが、②として、具体的にはどのような環境を想定しているのか伺いたいと思います。

3番として、厚労省が言う少子化を前提とした政策とは、美郷町ではどんなことが考えられるのか伺いたいと思います。

○議長（澁谷俊二君） 答弁を求めます。町長、登壇願います。

（町長 松田知己君 登壇）

○町長（松田知己君） ただいまのご質問にお答えいたします。

少子化の現状と対策についてですが、ご質問の1点目、町の出生数の推移と今後の推計については、町の年間出生数が、平成25年100人、平成26年104人、平成27年125人、平成28年100人、平成29年93人となっており、直近5カ年の平均は104.4人となっております。

今後の推計についてですが、単年度の出生数推計はありませんので、国立社会保障・人口問題研究

所の推計に準拠して、美郷町のゼロ歳児から4歳までの人口について推計しますと、2010年の663人に対し、2040年は326人に減少し、年平均に計算しますと、年間65.2人の出生数となり、現状より約39人減少する推計となります。

ご質問の2点目、子育て世代が安心して子供を産み育てられる環境について、どのような環境を想定しているかですが、若い世代がここに住み、出会いがあって主体的に結ばれて、自らの人生設計に沿って子供が授かり、授かった子供が健やかに成長していく環境、これを私は想定しております。

そのため、若い世代が住むための就労環境、例えば企業の誘致や農業の振興、業を起こす起業の推進など、各般の施策を今後も講じていくことが必要と存じますし、通勤環境として道路整備や適切な除雪も継続していくことが大切と考えております。

そのほか、地域個性の一層の確立による美郷町への愛着や誇りの醸成に向けて、民間企業との連携や特色ある取り組みも引き続き展開していくことが肝要と考えております。

また、出会いがあって主体的に結ばれるための出会いの環境、例えば民間の方々が行う出会いの場の創出に引き続き支援策が必要と考えているほか、ジャズコンサートや各種スポーツ大会を主催、あるいは支援し、広く出会う機会をつくり続けていくことも大切であると認識しております。

また、自らの人生設計に沿って子供が授かるために、お子さんの受け皿となる保育施設や制度の安定性が大切であるとともに、社会の変化に合わせた充実等も対応していくことが求められると考えているほか、不妊でお悩みの方には、引き続き妊娠に向けた支援策を継続していくことが大切であるとと考えております。

また、授かった子供が健やかに成長していくために、認定こども園や小学校・中学校においては、多様な教育機会、多様な経験機会を充実・強化し、望ましい人格形成並びに学力習得に意を払っていくとともに、各種福祉制度による経済的支援なども引き続き展開していくことが大切と認識しているところです。

こうした方向と、その方向に沿った各般の取り組みを実践していく環境が、私は安心して産み育てる環境につながると認識しております。

3点目、少子化を前提とした町の取り組みについてのご質問ですが、少子化問題の背景にある状況を多角的に分析するとともに、人口減少や超高齢化を前提にした社会のあり方を政府は提示すべきとの、ある新聞社の社説もあるように、やはり自治体としては、少子化のみならず、高齢化の進展、人口の減少を前提とした展開が求められるものと存じます。その意味で、人口減少が

もたらす社会への影響、少子化がもたらす社会への影響、高齢化がもたらす社会への影響を考えた施策が求められるのだらうと存じます。

大変に雑駁な把握で恐縮ですが、人口減少は働き手の減少と消費者の減少を意味します。また、少子化は働き手の減少と社会保障の担い手の減少を意味します。さらに、高齢化は社会保障の受益者の増加を意味します。

こうした意味を踏まえて今後の展開を想定すると、消費を求めての海外輸出の拡大、働き手を求めての高齢者の就業促進、社会保障を担うための高所得化、あるいは現制度の枠組みの見直し等が求められるのではないかと存じます。

こうしたそれぞれの想定に、国が担うこと、都道府県が担うこと、そして市町村が担うことがそれぞれあると存じますが、その具体については、体系立った整理と展開が必要であり、美郷町のみで論ずることは余り意味のあることではないと存じますので、どうかご理解をお願いいたします。

いずれ少子化が進んでくる前提で、社会活動に大きなひずみが生ずる前に、さまざまな立場の方々が議論し、早期に全体としての具体策を構築・展開することが肝要と私は認識しているところです。以上です。

○議長（澁谷俊二君） 再質問ありますか。（「はい」の声あり）14番、深澤 均君の再質問を許可いたします。

○14番（深澤 均君） 今町長の答弁の中で、出生数の推移を伺いましたけれども、くしくも全国のその100万人を割り込んでいるのと大体似たような、28年は100人、29年は93人というようなことで、何百分の1とか、そういうのでこう、比例しているような感じですけども、ことし中学校の卒業生、165人でありました。15年の間に70人ちょっと減っているような、そういう計算ができますけれども、もう15年すると、このままいくと恐ろしい数字になるわけでありまして、その、何ていうか、ものを言わない有事といいますか、もう忍び寄る有事、美郷町にとって、そういう受けとめも、ある意味できるものだと思います。

やはりどうかしてこの人口減少を食いとめないといけない、スピードを緩めないといけないということではありますが、これは町長の答弁にもありましたように、各般にわたっていろいろな施策をやっているということは、私も認めます。一生懸命頑張っている、なかなか効果が上がらないということで、ある程度町としても数字を入れた目標みたいなものを設定して取り組んでいくことも大事なのではないかなと。その現状をただ、こうだった、ああだったというだけでなく、目標を定めた取り組みというのも非常に大切なのではないかなと思います。

これは先日、一般会計の特別予算の委員会の中で発言がありましたけれども、子育てには欠かせない病後児の施設が美郷町から一番近いところの医院が閉院してありまして、いざというときに利用が非常に不便になっているというような実態にあります。

そういう、今美郷町では他町村からも非常に移住を受け入れていまして、その方々からすれば、実家が遠い、郡外にあったり、また他県であったり、そういうことで、いざというときに頼れる身内が近くにいない例が多々見受けられます。

あと、地元、実家が近くても、今の就業形態といいますか、社会の情勢を見ますと、我々のようなじじ・ばばの世代でも、雇用延長になっている状態でありまして、なかなか子育て世代の親世代には、何ていうか、昔みたいに子供を預ける環境にないのも実態でありますので、そこら辺も踏まえて、何ていうか、今までもその子育て世代の身になってやっているとは思いますが、さらにその突っ込んだところまで現状を見きわめて対策を講じていってほしいと思います。

○議長（澁谷俊二君） 答弁を求めます。町長、自席でお願いします。

○町長（松田知己君） 町として、その段階、その状況を踏まえて、さまざまな施策について踏み込んでやってきているつもりではありますが、議員のご指摘では不足であるというふうなお話かもしれません。受けとめて、さらにその今後のあるべき姿というもの、あるいはあるべき施策ということについては検討を深めてまいりたいと思います。以上です。

○議長（澁谷俊二君） 再々質問ありますか。（「はい」の声あり）14番、深澤 均君の再々質問を許可いたします。

○14番（深澤 均君） ちょっと質問から漏れてしまいましたけれども、病後児保育といいますか、そのいざという緊急、こども園にも行けない、預けないとか、そういうときの、個人ではなかなか解決し得ない部分のところを、行政として取り組んでいく考えはないものか、そこら辺の考え、どうのお考えを持っているのか、お伺いしたいと思います。

○議長（澁谷俊二君） 答弁を求めます。町長、自席でお願いします。

○町長（松田知己君） 議長、通告にない再々質問であります。答弁は必要でしょうか。

○議長（澁谷俊二君） 私もそう思って聞いていました。14番、いいですか。（「はい」の声あり）次の質問に移ります。

○14番（深澤 均君） それでは、2点目の質問に入りたいと思います。児童生徒の学校生活についてであります。

町内小中学校が学校統合になって6～8年ということで、子供たちも地域もそれぞれの学校に誇り

を持ちなれ親しんでいる様子うかがえるところでもあります。また、スポーツ、文化活動においても、その活動はすばらしく頼もしく感じているところで、多感なこの時期にいろいろと学び、多様な体験が後の人生の大切な宝になっているものと思っているところです。だからこそ子供ら皆が等しく学びを受け、健全な成長を促すため義務教育課程があるものと認識しているところでもあります。

しかし、子供たちの中には、学校に行きたくても行けない不登校に悩む子供たちも少なからずいるようでもあります。また、不登校の一因に挙げられるいじめなどもなかなかなくなる現状のようです。これらに対し文科省では、児童生徒の問題行動を初期のうちの対応ということで、積極的に認知に努めるべきとして、からかいやふざけ合いなども含めた調査を行っています。そこで、町内小中学校児童生徒の問題行動・不登校等、生徒指導上の諸課題に関する調査の結果と推移、そして調査公表はしているものなのか、伺いたいと思います。

また、前段で申し上げましたように、子供たちにとっては人生を左右する大変貴重な時間を過ごしていると言っても過言ではありません。子供たちが悩みを解決し、不登校にならないようにどのような対策、対応をしているものなのか、伺いたいと思います。

○議長（澁谷俊二君） 答弁を求めます。教育長、登壇願います。

（教育長 福田世喜君 登壇）

○教育長（福田世喜君） ただいまのご質問にお答えいたします。

ご質問のありました、文部科学省の児童生徒の問題行動・不登校等に関する調査におきまして、市町村ごとの結果は公表されておられません、市町村教育委員会の判断で公表可能なものがあります。そこで、町教育委員会では、これまで町議会などでご質問があった場合にご説明をしてきております。

文部科学省調査では、暴力行為、いじめ、不登校、自殺について調査しておりますが、最初に美郷町におけるいじめの認知件数についてご説明いたします。

文部科学省調査においては、平成27年度からいじめの解釈が変更されております。つまり児童生徒が他人の行為によって心身の苦痛を感じたと訴えたものは全ていじめと認知することになりましたので、ここでは変更後の平成27年度と28年度の結果についてお知らせいたします。

美郷町内のいじめの認知件数は、小学校で平成27年度が165件、28年度が59件、中学校で平成27年度が9件、28年度が7件となっております。なお、全ての事案が指導により早期に解決しており、重大な事案に至ったものはございません。

このような状況であります、いじめは、受けた児童生徒の心を深く傷つける行為であり、決

して許されないことでもあります。その立場から、各学校では道徳の時間のみならず、全ての教育活動を通して規範意識や思いやりの心の育成を図るとともに、児童生徒自らがいじめ問題に正面から向き合う集会を行うなどの取り組みも進めております。

また、いじめの芽を見逃さないように、定期的に学校生活アンケート等を実施したりして、よりきめ細かに児童生徒の状況や変化を把握し、早期発見・即時対応に努めているところであります。

町教育委員会では、少年保護育成委員会やPTAの代表など、学校外の有識者を交えたいじめ問題対策連絡協議会を年2回開催して、いじめ防止のための方策や関係機関との連携などについて協議を行い、それらも踏まえながら取り組みを進めてきております。

今後も、いじめ問題の解決に向け、全教育活動を通じて命や人権の大切さが実感できる指導を充実させるなど、心の教育を一層推進してまいります。

次に、文部科学省調査での美郷町における不登校児童生徒数であります。小学校では、平成26年度2名、27年度4名、28年度1名であり、中学校では、平成26年度11名、27年度8名、28年度12名と推移しております。1,000人当たりの不登校児童生徒数に換算して、全国平均と比較しますと、平成27年度の小学生だけが全国平均とほぼ同じでありましたが、それ以外は全国平均を下回る結果であります。

不登校となるきっかけについては、学校生活上の問題や家庭生活上の問題、本人の事情にかかわることなどさまざまであり、一人一人が異なる要因となっております。各学校では、不登校児童生徒に対して家庭訪問等での面談、学校の相談室等での個別指導、不登校児童生徒を支援する関係機関と連携した取り組み等、一人一人への対応を組織的に検討しながら取り組んでまいります。

一方、不安を抱えている児童生徒、保護者に対しては、必要に応じて県の配置によるスクールカウンセラーなどによるカウンセリングも受けられるようにしております。そして、児童生徒の悩みや不安を解消し、安心して学校生活を送れるようにするために、何でも話せる良好な人間関係となる学級づくりに特に力を入れてきております。また、授業を初めさまざまな場面において、複数の教員が携わることで、児童生徒の様子をしっかりと見取ることができるような配慮もしております。

さらに、年複数回、児童生徒や保護者へのアンケートを実施して実態を把握するなどによって、児童生徒の変化に気づいた際には、即座に情報を共有し、面談や家庭訪問等の即時対応をするチーム体制がつくられております。

町教育委員会では、このような各学校の取り組みを支援するとともに、今年度から中学校に入学してからの不安感や緊張感が少なくなることも狙いとした、町内3小学校の5年生・6年生の交流会を新たに実施したところであります。

昨年7月の全国学力・学習状況調査の美郷町の結果では、学校に行くのは楽しいと回答した児童生徒が、小学校6年生では92.9%、中学3年生では89.0%で、それぞれ県平均を2.3ポイント、3.5ポイント上回りました。

町教育委員会としましては、今後も全ての児童生徒に活躍の場があり、楽しく充実していると思えるような教育活動を推進し、児童生徒一人一人の心の居場所のある学校づくりを目指してまいりますと考えております。以上であります。

○議長（澁谷俊二君） 再質問ありますか。（「はい」の声あり）14番、深澤 均君の再質問を許可いたします。

○14番（深澤 均君） 今公表しているものなのかという問いに、議会に尋ねられたときだけ公表しているというふうでよかったですか。これは生徒にも公表していないという意味ですか。これは質問になっちゃうので、どういうふうに……。先日、六郷高校の卒業式のときに同封されていた「笹竹」という新聞、学校紙がありますけれども、これの裏面に「いじめを理解して」という、一面で大きく取り上げて、生徒自身が高校内のいじめに関して実体験やら何やら書いている新聞でありますけれども、やはり年齢的な差も確かにあると思いますけれども、こういうふうに公表して、みんなで共有する、ああ、自分だけじゃないんだなというふうに思うことが大事じゃないかなというふうに思います。

この中に、ちょっと目にとまったところがあるのですけれども、どんなことを講演とかなんかで望むかという欄に、人間関係に困ったときの立ち直り方を教えてほしいという高校生の自らのそういうあれがあります。いじめをしないでほしいとか、そういうこともあれなのですけれども、いじめがあるということを前提に、こういうことを述べている意見もあるということが、こういうことから大事なのではないかなというふうに思います。

それで、これもちょっと気づいたところなのですけれども、今回のいじめとは全然またちょっと話が違いかもしれませんが、大仙市の広報誌2月号「だいせん日和」2月号の中で、ちょっとこれ、手にとって読む機会があったので見たら、高齢者の心の健康という記事が、これも2ページにわたってありまして、平成21年から28年までの間の8年間の自殺者のことについて述べております。

その実態を公表しているわけですが、何と240人ぐらいの実数があるわけなのですけれども、その中

の96人が70歳以上の高齢者で、大半が家族のいる高齢者だというような調査結果があります。どちらかといえばいじめとか不登校も余り公表しないで、こういうことも公表しないでというのがあれなのですけれども、こういうふうに公表することで、みんなで共有できるというか、家族がいるから安心というわけではないんだなというようなことを知ることができるということで、できるだけやはりこういうことは公表できるようにしたほうが、私はいいのではないかなというふうに思っていますけれども、その点についてお伺いをしたい。

○議長（澁谷俊二君） 14番、済みません。ちょっと待ってください。いいですか。答弁できますか。（「はい」の声あり）それでは、教育長、自席でお願いします。

○教育長（福田世喜君） ただいまの再質問についてお答えいたします。

いじめ・不登校のデータを公表するかどうかという1つの、検討することは、その当該の児童生徒へのそういう情報が伝わったときの影響や状況について十分配慮しなければならないと。そのことが第一に大切なことだと考えております。

それで、先ほど町の情報、結果については、議会の質問においては、あった場合にはお答えするというのは、これは町教育委員会が公表していることで、町全体の結果であります。このことを公表するのやはり、その点、先ほども児童生徒、当該の児童生徒等への影響を十分考慮して、ここの場で公表する部分には、いろんなそのプラスの面もご指摘の点がありますので、総合的に判断してよいかと思っただけで公表したところでございます。

なお、学校でこの数値を学校ごとにどう公表するかは、やはり当該の児童生徒への影響を考慮して、慎重になされるべきだというふうに思っておりまして、その点は学校の状況で行っておりますが、ストレートにやはりなかなか出せない状況があるかと思っております。そういうことにご理解をどうかお願いしたいというふうに思います。

○議長（澁谷俊二君） 再々質問ありますか。（「ないです」の声あり）

これで、14番、深澤 均君の一般質問を終わります。